|  |  |
| --- | --- |
| りんごの語源・由来りんごは、古く中国を経由して渡来し、西欧系のリンゴの普及以前に日本でも栽培されていた。林檎は中国語で、「檎」は本来「家禽」の「禽」で「鳥」を意味し、果実が甘いので林に鳥がたくさん集まったところから、「林檎」と呼ばれるようになった。「檎」は漢音で「キン」呉音で「ゴン」と読まれることから、「リンキン」や「リンゴン」などと呼ばれ、それが転じて「リンゴ」となった。平安中期の『和妙抄』では「リンゴウ」と読んでいる。また、中国語で林檎を「苹果（pingguo）」とも呼ぶことから、「林檎（リンゴン）」と「苹果（pingguo）」が混ざり、「リンゴ」と呼ばれるようになったとも考えられている。 | バナナの語源・由来バナナは、英語「banana」からの外来語。バナナの語源には、手足の指を意味するアラビア語「banaana」に由来する説と、この果実を指すウォロフ語「banana」とする説がある。バナナの1本ずつを「finger（指）」と呼んだり、バナナを扱う日本の会社では房を「ハンド」と呼んだりするせいか、日本では「手足の指」を意味するアラビア語説が多いが、英語圏の文献で見られるのはウォロフ語説のみである。アフリカのコンゴでは、果実部分を「banaana」、木の部分を「banano」と呼ばれていたことが、1563年のポルトガルの文献に現れる。 |
| みかんの語源・由来みかんは、1603年の『日葡辞書』に「miccan」と表記されているように、古くは「ミッカン」と発音されていたが、促音の「ッ」が省略され「ミカン」となった。室町時代に中国から伝えられた品種が、それまであった柑橘類とは異なり甘かったことから、蜜のように甘い「柑子（カンジ・コウジ）」の意味で「蜜柑（ミッカン）」の語が生まれたと思われる。「蜜柑」の文字は、室町時代から見られる。 | 梨の語源・由来梨の語源には、果肉が白いことから「なかしろ（中白）」、略されて「ナシ」になったとする説。梨は風があると実らないことから「かぜなし（風無し）」で、「ナシ」になったとする説。果実の中心が酸っぱいことから「なす（中酸）」が転じたとする説。梨は次の年まで色が変わらないことから「なましき」が転じたとする説。「あまし（甘し）」や「ねしろみ（性白実）」から、「ナシ」になったとする説。奈良時代当時、ナシとリンゴの原種となったカラナシ以外に、果実の底が著しくくぼんだものが見当たらないことから、「つまなし（端無し）」の「つま（端）」が脱落したなど、諸説あるが未詳。平安時代には、「ナシ」が「無し」に通じることを忌んで「ありのみ（有の実）」と呼ばれたり、「無し」に掛けた言葉や歌は多く見られるが、語源と結びつくものはない。 |
| いちごの語源・由来いちごは、『日本書紀』には「伊致寐姑（イチビコ）」。『新撰字鏡』には「一比古（イチビコ）」。『和名抄』で「伊知古（イチゴ）」とある。これらのことから、「イチビコ」が転じて「イチゴ」になったと考えられる。イチビコの語源は諸説あり、「い」が接頭語、「ち」は実の赤さから「血」、「びこ」は人名に用いられる「ひこ（彦）」を濁音化したもので植物の擬人化とする説。「いちび」は「一位樫（いちいがし）」のことで、「こ」は実を意味し、いちごの実が一位樫の実と似ていることから名付けられたとする説。「いち」は程度の甚だしいことを意味する「いち（甚）」、「び」は深紅色を表す「緋」、「こ」は接尾語か実を表す「子」の意味で、「甚緋子（とても赤い実）」とする説がある。現在、一般的に「いちご」と呼ばれるものは、江戸時代の終わり頃にオランダから輸入された「オランダイチゴ」であるが、それ以前は「野いちご」を指していた。オランダイチゴも赤い色が特徴的だが、野いちごは更に濃い赤色なので、いちびこ（いちご）の語源は「い血彦」や「甚緋子」など、実の赤さに由来する説が妥当である。野いちご野いちご民間語源には、1～5月に収穫されるから「いちご」といった説もある。しかし、いちごの古名「イチビコ」の「ビ」が何を意味したか、「5（ゴ）」が「コ」と呼ばれた理由など、基本的なことに一切触れておらず説得力に欠ける。漢字の「苺（莓）」は、「母」の漢字が「乳房」を表していることから「乳首のような実がなる草」と解釈するものもある。しかし、「苺」の「母」は、「どんどん子株を産み出す」ことを表したものである。 | 柿の語源・由来柿は実がかたいことから、「カタキ」の意味。つやつやして輝いていることから「カカヤキ」など多くの説がある。しかし、これらの特徴よりも、秋の山野になった実の赤い色の方が印象は強く、「アカキ」の上略が語源と考えられている。「アカキ」の「キ」については、「赤木」の「木」、「赤き実」の「き」、「赤黄」の「黄」など考えられるが断定は難しい。柿は中国の長江流域に自生していたものが、栽培で東アジアに広がったもので、現在では日本の秋を代表する果樹となっている。『日葡辞書』で「リンゴに似た日本の無花果（いちじく）」と分かりづらい紹介をしているように、柿はヨーロッパには無い果樹であった。南蛮貿易によってヨーロッパへ伝えられたことから、学名でも「Diospyros Kaki（Diospyrosは神様の食物）」と「カキ」の名が使われ、食材としても「KAKI」と呼ぶ国が多い。 |
| メロンの語源・由来メロンは英語「melon」からの外来語で、ギリシャ語の「mēlopepōn」に由来する。mēloは「りんご」、pepōnは「ウリ」で、mēlopepōnは「りんごのようなウリ」を意味する。この語がラテン語で短縮されて「mēlon」となり、フランス語を経由して英語に入った。メロンはキュウリの仲間で、植物的にはマクワウリと同系である。そのため、マクワウリの漢名「甜瓜（てんか）」を用いて「西洋甜瓜」といったり、単に「甜瓜」ということもある。 | スイカの語源・由来スイカは、漢語「西瓜」を唐音で発音されたもの。中国で「西瓜」と称した由来は、10世紀頃に西域から伝わった瓜という意味からと考えられる。日本でスイカは「水瓜」とも表記されるが、当て字である。この漢字の由来は「スイカ」の音からや、英語でも「watermelon（ウォーターメロン）」と称されるように、水分を多く含むためであろう。日本へのスイカの伝来は、16～17世紀とされることが多いが、南北朝時代の漢詩集『空華集』の中で「西瓜」を詠じていることから、14世紀には伝わっていたと考えられる。 |
| 桃の語源・由来モモの語源には、「真実（まみ）」が転じたとする説。実が赤いところから「燃実（もえみ）」の意味。実が多く成ることから「百（もも）」、もしくは「実々（みみ）」が転じたとする説。毛が生えていることから「毛々（もも）」の意味など、十数種の説がある。古くから桃は、民話『桃太郎』で子供が生まれたり、日本神話で悪魔払いに用いられるなど、花や木よりも果実に重点が置かれており、実に意味があると考えられるため、「モ」は「実」の転であろう。沢山成ることから「実」を強調した「実々（みみ）」を軸に、「百（もも）」にも通じる語と思われる。『本草和名』や『和名抄』では「毛毛」と表記され、実に毛が多く生えていることを表している。しかし、「モモ」の音が先にあり、後からその状態を表すようになったと考えられ、毛を語源として採用するのは難しい。漢字「桃」の「兆」は左右二つに離れるさまを表し、「木」＋「兆」で実が二つに割れる木を意味している。 | パイナップルの語源・由来パイナップルは、英語「pineapple」からの外来語で、日本には1845年にオランダ人によって伝えられた。英語の「pineapple」は、「pine（松）」と「apple（りんご）」を合成した名前である。パイナップルはブラジルやパラグアイが原産といわれ、ヨーロッパには1493年に伝わり、各地で食用果実や観賞用として利用された。当時のパイナップルは15cm以下で今よりもはるかに小さく、その姿が松かさ（松ぼっくり）に似ていることから、英語圏では「pine-cone」と呼ばれ、味や香りが「apple（りんご）」に似ることから、1500年頃に「pine-apple」と呼ばれるようになった。一説に、「apple」は「丸い果実全般」を表す語でもあったため、「松（pine）の果実（apple）」の意味で「pineapple」の名がついたともいわれる。 |